

悩める受験生へ

●Y君は、高3の6月ごろYゼミから移ってきた。英語の文法も単語も熟語もとんでもない状態。長文なんか読む以前。模試は最後まで低空飛行、E判定のオンパレード。そして、結局、中央大学法学部に合格。

●Uさんは、10校ぐらい受験。偏差値でいえば10番目の所だけ合格で、第二志望から第九志望まで全滅。そして、最終結果、第一志望の早大合格。

●毎年こんな人たちがたくさんいる。一体どうしてこんなことが起こるのだろうか？人は、「運がよかったです。」というかもしれない。そう、確かに運は良かったのだ。しかし、宝くじではないのだからとにかく合格点をとったのだ。この「合格点をとった」という事実を重視してほしい。勿論、やったことのある問題が出たこともあるが、それとてせいぜい1〜2割。残りの問題を解かなければ、合格は不可能だ。では、どうして合格点をとるところまで行けたのか？その秘密を解き明かそう。

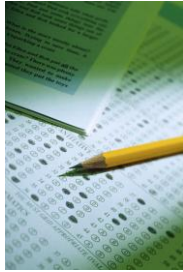
●まず気迫である。「何としても合格しよう」という気迫である。この気迫があれば、勉強の能率は2倍にも3倍にもなる。問題を解くとき

にも、正解を出すためにありとあらゆるヒントを探し、カンもさえるようになる。今まで使っていなかった能力が発揮されるのだ。

●次に、その気迫がさせることだが、できるだけ時間をとることだ。今から入試までの日程を確認して、ムダな時間を作らないこと。勿論、睡眠時間と食事はきちんと確保すること。

●みんな、やることを絞っていた。新しい問題集は一回では身につかない。それより今までやってきたことを死ぬほどくり返すこと。あいまいな100の知識より、確実な50の知識がはるかに有効。

●みんな、過去問の研究をしていた。その高校、大学で全く同じものが出ることはないが、他の高校、大学では出る。何より、その出し方に慣れることで得点力はグンと上がる。そして、実は、理数系では、見た目は違うが、使う知識や道具が全く同じものを同じ学校で出すことはよくある。



●分かったかい？残された時間はそう多くない。気迫をもって、先輩たちがやったことを、きみ達もくり返すことだ。「落ちたらどうしよう」「浪人したらどうしよう」と思っている人も多いと思うが、そうならその時に考えればいい。別に死ぬわけではないのだ。大事なことは、充実した時間を過ごす自分を作ること。そうすれば、不合格になっても浪人になってもまた動いて行く勇気がわいてくる。心配してい

るだけでは、何も得られない。いや、勉強も手につかず一番望んでいない状態に自分をもっていってしまうぞ。健闘を祈る。(小林(健))

変わるよき男

●私が高校3年生の受験時期。精神的な支えになつてくれていた塾のS先生が突然倒れた。

●11月の下旬に塾から、S先生が病気のため担当している講座を閉鎖するという知らせが来た。私自身はすでに推薦入試を終えていたが、不合格だった場合、S先生の冬期講習を受けられないことが非常に不安だった。

●S先生は高1の夏から英語を担当してくれるようになり、私の単純な疑問や質問にも一つ一つ丁寧にそして真剣に答えてくれた。そこからS先生に対する信頼が生まれ、そのうちに英語の学習方法から人生論に至るまで、様々なことを話してくれるようになった。私の中でS先生は、先生以上に一人の大人として尊敬できる絶対的な存在だった。

●S先生の病気の知らせを受けた後、私は推薦入試で運良く合格したが、3月に塾へ遊びに行ってもS先生の病状は分からなかった。

●それから半年が経ち、違う塾でS先生が講義をしていると偶然知った。そこで、私の通っていた塾に問い合わせてみると、S先生と連絡を取ってくれて、会えるようにしてくれた。

●実際会ってみて話をすると、S先生は実は白血病だったことがわかった。生死をさまよっていたながらも、私たちの合否や進路状況は聞いていて、知っていてくれた。そのことに驚いたし、S先生の思いがとでもうれしかった。

●S先生の白血病は、その後5年間再発せずにより切れたら大丈夫だということで、体調をみながら時間を作っていたとき、何回か会うことができた。その際には、S先生の英語に対する熱い思いや今まで成功してきた学習方法など、教育談義とも呼べる話をたくさんさせてもらった。私はS先生に会うたびに、病氣と闘いながらも前向きに自分の信じた道を歩いているその姿から、勇気と元気をもらっていた。そして、今までのお礼がしたいと思い、毎年12月に特産品の野菜を送ることにした。

●ちょうど野菜を送り始めて3年目、野菜が届いたとの電話を最後にS先生と連絡が取れなくなった。その2ヶ月後、S先生が亡くなったことを知り、愕然とした。

●それからしばらくして、S先生の奥さんが私も含めて当時S先生がかわいがっていた生徒数人をお墓に連れて行ってくださり、そのときに「最後に食べられた食事が、教え子からの野菜でよかったと小林君に伝えてほしいと言われたの。」と話してくれた。本当に言葉がなかった。

●その当時は、まさか自分がS先生と同じ塾講師の道に進むとは思わなかったが、これも何か

の縁と思い、今ではS先生に教えていただいた学習方法を自分なりに伝えている。

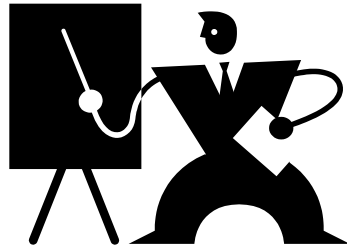
●こう書くところが偉そうだが、実は私はダメな生徒で、S先生のいう英語の有効的な学習方法を最後まで信じられずに、途中で挫折してしまっている。そして、大学の英語の授業で長文読解のスピードについていけず、とても苦勞した。

●S先生の長文読解についての考え方は、実際の大学入試に出る長さの分量の英文を10個ないし15個くらい、普段自分たちが日本語の文を読むときの半分くらいのスピードで理解できるようにしなければいいというものがある。そのためには、同じ文を繰り返し読み込んで、暗記しながら理解を深めていく。

●これはまさに、現在創学舎で実施している教科書英文の練習・テストと同じやり方である。同じ文を繰り返し読んだり、書いたりしながら暗記することで、その英文はもはやわざわざ日本語に訳さなくても理解できるようになっているはずである。

●英文を繰り返し書きながら覚えることは、時間と労力を費やす大変な作業だが、その先には入試や高校の授業で同じような英文にぶつかったとき、すらすらと読める自分があることを信じてほしい。

(小林(英))



絶対自己肯定主義宣言!

●先日、テレビのドキュメンタリーで、ある女性のことを知った。中西麻耶さん、二十二歳。二〇〇八年の北京パラリンピックの女子陸上短距離決勝に、日本人でただ一人出場したアスリートだ。彼女は、ソフトテニスで国体強化選手に選ばれるほどの逸材であったが、二十歳の時、仕事中に鉄骨の下敷きとなり、右足を失った。その後、義足での陸上の世界があることを知り、ランナーへ転身すると、あっさり短距離の日本記録を更新。競技を始めてたった二年でパラリンピックの日本代表に選出されたのである。

●勿論、ハンディキャップを持つ身で一生懸命に走る姿に、感動するし、頭の下がる思いもある。しかし、何よりも圧倒されたのは、半端ではない彼女の明るさと、前向きさであった。事故に遭った時も、医者はまずつなげてみようと言ったそうだが、彼女は「もとの状態でスポーツができないなら切って下さい」と即座に決断したという。また、陸上に転向したのも、「百米を十五秒で走れば世界に行けるなんていいと思わない?」との知人からの誘い文句がきっかけだったとか。とにかくがむしやらで、「走るのに一生懸命なんだから邪魔しないで」という気迫がガンガン出ているのだ。そして、強気。「パラリンピックの出場が決まった時点で、

で、(気持ち)終わっちゃう人っているじゃないですか。なんか、違うと思うんですよ……。ここに来るまでに代表になれなくて涙をのんだ人たちがどれだけいたのか本当にわかっているのかな、って。だから私は気を抜きたくないんです。」その発言は、まっすぐすぎるがゆえに、向こう見ずで、怖いもの知らずという印象を残すことも否めない。しかし、心に響く。

●そして、彼女は結果を出す。北京パラリンピック百m予選では十四秒を切って日本記録をまたも更新した。決勝の結果は六位。しかし、続く二百mの決勝では何と四位という成績をおさめたのだ。だが、実はこの時不運が彼女を襲ったのだった。雨の中の競争で他レーンの選手がスリップして彼女の進路を塞ぐアクシデントが起きていたのだ。本来なら届いていたかもしれないメダルが、彼女の手をすり抜けていった。「悔しくて、悔しくて……。でも、ああいう状況に対処できなかったのは、私が、選手としてまだ未熟だったからです。たった、二年で大した覚悟もなしにひよいと出てきたんですから、やっぱりボロが出ますね(笑)」



●彼女を通して、学んだことは、他の誰が何と言おうと、努力する自分を肯定してあげる姿勢である。中西さんが、初めて日本新記録を出したとき、彼女は何と言ったか。「わずか3ヶ月で日本新記録なんてラッキーだという人もい

ますけれど、私はソフトテニスをやっていたから、基礎もできていたし、その上できちんと訓練と努力を続けた結果だと思っっています。」はつきりと、自分の努力を公言し、自己肯定する力強さ。障害の有無に関係なく、この強さはすごい。

●今、受験を前にして、頑張っている人たちがたくさんいる。そして、「伸び」を実感している人たちも増えてきたはずだ。その人たちは、謙遜せずに自分の努力の結果だと胸を張りなさい。そして、頑張っている自分をしっかりほめてあげなさい。あなたたちの背中を見て、他の人たちも動き出すのだ。

●なかなか伸びない、と悩んでいる人たちは、もう少しの我慢だ。伸びている人たちが気になるだろうが、君は君だ。自分を信じて努力を続けよう。かつて、すべてのものの存在を疑ってかかったら、それを疑っている自分の存在は否定しようがなくなった、と言った大哲学者がいたが、その通り、この世界に最後まで応援してくれる者がいる。そう、自分自身だ。

●そして、もし、この期に及んでも、努力をすることに向き合おうとせず、「何とかなるさ」と人生を軽んじている人がいるとすれば、君には、「能天気」という言葉があることを教えておこう。

「中西麻耶さんのブログのアドレス」

(関)

<http://ameblo.jp/n-maya/>

